

明日の記憶（H19年日本アカデミー賞受賞作品）

（堤幸彦監督、渡辺謙主演、樋口可南子共演）

（働きざかりのサラリーマンを突然襲った若年性アルツハイマー病）

（病院の屋上で）

医師：アルツハイマー病でまちがいありません。

医師：佐伯さん

佐伯（渡辺謙）：先生、若年性のアルツハイマー病って、進行がはやいんだよね。

医師：早いケースもあります。ですが、それには個人差があります。ですから、一概には、

佐伯：そんなこと聞いているんじゃないんだよ。本みりゃあ分かるんだよ、そんな事。先生、この病気ってさ、止める薬も治る薬もないんだよね。だったらさ、あんた、ゆっくり死ぬんだって言ってくれよ。病気のこと分かってさ、それを言われる奴の気持ちなんか考えたことないだろ。

医師：父が同じ病気なんです。佐伯さん。僕はこの仕事についてまだ日が浅いですが、はっきりと分かることがあります。人の死は、人が死ぬということは人の宿命です。病気にもなります。老いるということも人の宿命です。人体というものは、最初の十数年というものを除いては、あとは減んでいくだけなんです。でも、だからといって、何もできない訳じゃありません。新薬だってできるかもしれ

ない。僕は自分にできることをしたい。それだけです。佐伯さんにも、諦めないでほしい。……

妻 枝実子（樋口可南子）：あなた。

佐伯：俺、俺が俺でなくなっても平気か？

妻：平気じゃないよ。私だって怖い。

佐伯：みじめだな俺。

妻：なさけない顔しないでよ。あなた達って、いつつもそう。そうやってどんどん自分達だけで行っちゃって。理恵が高校の時だってそう。あの子ぐれちゃって。あたしすっごく大変だったんだから。あなたはいつもいないし、でも私、どんなことがあったって我慢したわ。だって家族だもの。あたしがいます。あたしが、ずっとそばにいます。……

（娘の結婚式で）

佐伯：申し訳ございません。感激のあまり、用意してきた原稿をどこかに忘れてしまいました。あらためまして、伊藤家、佐伯家を代表いたしまして、一言、ご挨拶を申し上げたいと思います。本日は直哉君、理恵のために大勢お集まりいただきまして、まことにありがとうございました。ご存知のとおり、理恵のおなかには、新しい命がやどっております。今日から2人は、夫となり、妻となり、すぐに親となります。私もまだ50を前にしてもう、おじいさんです。少し、いそぎすぎなのではないかなと正直思ったこともございました。

しかし、この年で孫がだけの、家族が増える、1つ1つ思い出が増える。案外悪くないのではないのかなと、今ではこの2人の粗忽者に感謝の気持ちで一杯です。大切な原稿は忘れてしまいましたが、皆様への感謝の気持ちは忘れずにおります。

・・・・・・・・

(思い出の山で)

佐伯：あのう、僕、佐伯といいます。佐伯正行。あなたの名は？

妻 枝実子：枝実子といいます。枝に実る子と書いて枝実子。

佐伯：枝実子さんか、いい名だな・・・・・・・・。









